

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079
振替 東京0-58431 労金 東京労金本店 No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

「スケジュール闘争」……………2

◇職場の資本論学習会① 国労東建工◇

『資本論』一卷読破まであと一歩……………3

春闘再構築への一基調……………5

— 八四春闘をめぐる情勢(二) 岩井 章 —

労働の二重性を考える……………9

— 「発想の転換」で労働運動の再生は可能か? —

「首切りを迎えつつ組織づくり」へ一歩前進……………15

— 第一七回全国青年団結集会の報告 —

岩下武夫著(社会通信社刊)

「ソ連脅威論」の虚構

好評発売中! B6版 二百頁

旬刊社会通信

NO. 227

一九八四年四月二日

一九八四年四月二日
(毎月一日・二日・三日三回発行)

■ 巻頭言 ■

「スケジュール闘争」

春闘のことであるが、賃金の有額回答前に組合がストの日程を決めると、日経連は、必ずこれを「スケジュール闘争」といつて非難する。今春闘もそうである。「日経連タイムス」三月二二日号「労組はストを目的とするな」がそれである。

「今回の集中回答引き出し戦術に関連して懸念される問題は、ストを背景に回答を求める、という動きが私鉄総連、ゼンセン同盟、電機労連など多くの組合に出ていることである。しかも、スト戦術の進め方が、かなりスケジュール闘争の強いことである。」

「ストライキの良い悪いは別として、労組が実力行使を進める場合、交渉をとことん詰めて、にもかかわらず交渉は決裂というプロセスが少なくとも必要ではないか。」

それなのに、「有額回答前にスト日程だけを設ける」ことは「スケジュール闘争」であり、それは「昭和四八年の第一次オイル・ショックを境に」「遠く去った」「力と力の対決で賃金を決定する」という、スト至上主義への後戻りである、というのがその「主張」である。これはストをつぶすために昔から使ってきた日経連の古くさい理論である。

長年のストなし「管理春答」で「良好な労資関係」ができあがった。この労資関係はたとえ一回や二回、春闘でストを打たれたからといって、簡単に崩れるものではないことを資本は確信している。しかし、長年のストなし春闘ですっかり眠り込ませている組合員をストによってめざめさせ、賃金だけでなく、他の労資間問題解決の闘争手段としてストを自覚するようにでもなったら、そのときこそせつかくの「良好な労資関係」は崩壊する、との危惧から「スケジュール闘争」、「スト至上主義」の非難を浴びせるのである。

資本側はストのない「良好な労資関係」は今後も引きつづき維持したい。といつて組合が満足する回答は出せない。しかし、ストはやるな。これが「スケジュール闘争」非難の中味である。こんな虫のいい一方的ないい分を組合が認めたら春闘は完全にふっ飛ぶ。それどころか組合の存在さえ問われる。

ストは有額回答のあと、交渉を詰めた上で決裂した場合に打つべきものである、との日経連の主張は、表面上の理屈としては成り立つ。しかし、資本の側が春闘を有利に運ぶために、有額回答を延ばしに延ばし、それまで組合はストが打てないとしたら、まったく資本ベースの春闘に終ってしまう。そういうことはこれまでの長い春闘の歴史の過程ではあった。こんなとき組合からすれば、組合主導の春闘にするため、有額回答を出させるためにストを打つこともある。それをやってきた組合もある。いつストを構えるかは組合が決めることであつて、それが有額回答前だからといつて非難される筋はない。

資本主義社会においては、労資は対立関係にあるのだから、労資間問題は好むと好まざるにかかわらず、すべて「力と力の対決」の結果決まる。力の対決を非難する日経連自身、労資間問題をすべて力で解決している。「管理春答」は力で組合をねじふせている。

賃金をはじめとする労資問題が労資の力関係、つまり階級闘争の結果決まるものである以上、つねに相手の力を上回る体制を確立して階級闘争に臨むのは当然である。組合がストを背景に有額回答を求めるのも、スト日程、スト内容を予め決めるのもそのためである。決してストを目的とするものではない。

日経連はなにをいおうが勝手だが、大事なことは、われわれが、こうした非難に惑わされないことである。

◇ 職場の資本論学習会 ① 国労東建工 ◇

『資本論』一巻読破まであと一歩

「職場に労働運動を」の国鉄労働組合のスローガンのもとに、一人ひとりが参加する組合運動を目ざして小さな活動の一環として取り組んできた職場の資本論学習会のようす、反省などを報告します。

まず環境づくりから

資本論学習会は七五年七月に、当初三年間で第一巻(三冊分)を終えるため頑張ろうというこゝろで始めました。あわてず、あせらず、気楽に取り組んできたためか、学習法が未熟だったせいなのか、九年を経た今日でも第一巻が終了していません。国鉄労働組合の基本方針である一人ひとりが自から参加する組合活動といっても組合員がやみくもに走り廻ることではなく、小さなこと、簡単なこと、誰にでもできる範囲の活動をおし、組合員の意識を高め、組織に力をつけることだと理解していました。ともすれば従来の組合活動といえば、集会に参加し氣勢を上げデモに参加すること、ストライキ指令に従いストライキに参加する、団体交渉で机をたたき当局につめよるような指導部に付いて歩くといった組合参加が主のようでした。

当職場では、日刊紙、週刊紙づくり、全組合員が参加する体制がつくられつつありました。また国労通教の小集団学習が始まっており、役員学習会ももち、やっと組織づくりに取り組んだところでした。こうした組織づくりの一環として資本論学習会が始められました。資本論を学習するにあたって、三年間続けられるか、途中で解散かという危惧はありましたが、幸い和気先生などに講師として来ていただけるといふ御好意に甘えた恵まれた学習会になりました。

組合活動でも学習でも重要なのは意気込みだけでなく、それ等を取りまく環境づくりも重視しなければなりません。環境づくりは組織づくりと同様に大切です。この学習会も第一・二・五木曜日夜におこなっていますが、木曜日は学習の日という位置づけで、昼の休憩時間は全職場で通教の学習会、役員学習会は二・四の夜と環境づくりから始めました。だから班会もなるべく木曜日はできる限り避けてもらい、学習会を優先する配慮をしても良かったです。

かじり付いたら最後まで

資本論を輪読した後、レポーターによる内容の骨子を報告、報告の後に本文に入り行を追って質疑討論と進め、内容と実態との突き合せをするような学習会です。前もって学習をしてこないと討論に参加できず、学習会がつまらないものになってしまいます。価値論の部分は難解きまわり投げ出したくなりそうでした。講師が都合で来られないときなどは、スズメの学校でワイワイ、意味が解らず、個々人が黒板に向い懸命に自説の述べ合いになり、結局次回に持ち越して講師に説明を求めるといふことに落ち着き、ぜんぜん先へ進めない時もありました。また持ち越した部分について、講師のいとも簡単明瞭な解説を受けるときなど、頭の悪さ、努力不足がはげしくなりました。そのような場合には要は字句や文章の解説に目的があるのではなく、マルクスが労働者に与えてくれた精神が学べれば、それでいいんだと慰めていました。第一回目の学習会で和気先生が「資本論を研究したからといって、明日から何かができるものではなく、長い間に血となり肉となって滲み出てくるものです」という主旨の言葉が胸に残っています。いつになったら学習の結果が滲

み出てくるか判りませんが、とにかく資本論にかじり付いた以上最後まで、いつ最後になるか判りませんが投げ出さないという気持です。

どんなに議論をしても、遅くなくても学習会で疲れたという言葉聞きません。自分たちのために学習をしています。メンバーの中で仕事を終えて、住いを通り越し一時間をかけて参加した人もいました。彼は家庭の都合で関西へ転勤しました。正直に目に見えない楽しさは何一つ無いように思います。資本論が理解できたか、幾等かでも組合の組織力が高まったか、論文が書けるようになったか疑問です。価値論は九年経ち忘れてしまった人が多い。人事移動の多い職場で組織力が高まったとは考えられません。論文も書けなことが唯一のなぐさめになっています。

向坂先生宅に伺い先生の資本論にまつわる話しを、万年筆を、膝を付き合せ気楽に談笑して下さったことが楽しい出来事になっています。

苦しかった資本論学習会攻撃

学習は闘いであるといえます。本当に自からとの闘いです。多くは誘惑との闘いです。付き合いと称する酒の飲会が余りにも多く、飲会に飲まれない強靱な気構えが要求されます。二度、三度と続けて負けてしまうと立ち直るのが困難になり脱落してしまいます。学習会から遠ざかる人の原因に結婚、子供の誕生を機にというのがあります。一方学習会メンバーが組合役員に入り、組合業務の優先による物理的理由によって連続欠席という状態も生じています。半年間休んでしまつと声をかけても「正月が明けてから」、「出ようと思っているんだが」と意識の中で自からの闘いに負けてしまっています。こうした理由によって約三分の一のメンバーの長期欠席と離脱があります。

最も苦しかったのが国鉄当局の資本論学習会攻撃でした。特に当局のいう「主謀者」の人事移動に見せかけた、資本論学習会の解体です。当人を国鉄の末端管理者である助役にしていまい組合から切り離すという、現在の国鉄の状況からは考えられないような法で、「君の将来のためだ」、暗に「家族の幸せのために、いつまでもやっている」とロクなことにならない。「首を切られるぞ」と、操り返し迫ってきたのです。このときほど怒りを覚えたことはありません。一人に攻撃がかけられてくると労働者は弱いもので、気持も弱気になってしまいます。幸い多くの仲間、先輩の支援、励ましに支えられ危機を乗り切ることができました。労働者が、資本論を学ぶことで、資本は労働者の生活の糧までも奪おうとする。生活の糧と資本論を取り引きしなければならぬほど資本論が、労働者の武器であることを資本目からが認めました。

もう一度やると面白くなりそう

資本論を「いい加減にやらずに正面から取り組んできた」「人に教えることはできないが、なんとなく解ってきた」、「二人の時でもやった」、「幾ら読んでも解らない方が多かった」、「それなりに解らない同志、もたれ合いがあった」、「毎週やったらイヤになるだろう」、「もう一度やると面白くなりそうだ」、「職場の活動の中核であり、芯になっている」等々、学習会メンバーの声を聞くことができました。

社会党の現実路線、労働組合幹部の整合性論に見られるとおり、労働者階級の理論は非常に弱まっています。情勢が厳しければ厳しいほどこのような現象が顕著になってくるように思われます。ともかく職場では、こつこつ資本論を道標として、資本という敵から学び、仲間から学び、一歩一歩階段を登るように力をつける他ありません。

春闘再構築への一基調

—— 八四春闘をめぐる情勢 (二) 岩井 章 ——

岩井氏のこの論文は一月にかかっている。そして、今、春闘がたたかわれている真最中でもある。この論文を転載するのは、この論文にこれからの労働運動の総路線が説かれていいるからである。「バタバタするな」「基本に徹せよ」、そして「全情勢を適確にとらえ反撃の土台をつくれ」と。

岩井氏は春闘前段に「労働運動の総括と展望―日本労働運動の階級的強化と八四春闘前進のための提言」とする冊子を出している。そしてすべての自覚した労働者の意見を求めている。

(編集部)

八四春闘に向っての一基調

春闘をつくり上げていく為の原則をこれから書く。春闘戦術ではなく運動を強めていくための基本についてである。

① 第一に、大衆路線の徹底こそが春闘組織(運動強化)の最重要項目だ。前に、総選挙のことを書いたが、その中で社会党の前進を勝ちとったのは、一人一人の労働者・勤労者が自ら動き努力したからだと言った。つまり、選挙であれ、春闘であれ、一人一人の労働者・勤労者がいかに動くか。幹部活動家は、いかに労働者が動きやすい様に手助けするかが大衆路線ということである。民間大手の組合の中には、春闘とは、幹部が会社幹部と交渉すればよいと考えている者もある。幹部請負主義である。このやり方では、背景に力がないのだから、全く資本の譲歩を期待することはできない。

国労の場合は、欠陥は多くあるが、基本的に大衆路線からはずれていないとは思わない。ただ、最近はその一方的に総てを押しつけている。どんなに条理をつくして追及しても決してその妥当性を認めない。「貴方はそういうが、私達はこうする」という交渉の経過のようだ。つまり、ここではもう交渉というものはなりたっていない挑発をかけているともいえる。すっかりなめられているともいえよう。なめられているのは、国労労働者だけでなく、労働運動そのものが力がない、どうせやれるものではないのだからと考えているのだろう。

このような当局の態度に対してどう闘うか。「交渉」の場だけで敵をおいつめることはできない。現場の組織力をいかに強めていくか。

ここでいう組織力とは、労働者の統一した要求、歩調を揃えた敵愾心である(思想性)。団結して敵に抗議する姿勢だ。労働者を人として扱わない。その非道に対する闘う心である。

それは状況によってストライキその他の大衆行動に発展するし、状況によって沈黙の抗議となる。国鉄当局者は国労をつぶすこと、御用化することしか考えていない。立場は違うが、共通の土俵を探そうなどと考えてはいないようだ。

② われわれの要求とは何か。重点は人間らしく生活できること、権利が守られること、

そして平和な社会であることだ。むろん、春闘の軸の一つは賃金である。だが、賃金をひきあげるだけが春闘ではない。春闘というより、労働運動の目的は、人間として、労働者として「らしく」生きていくことを求めているのである。生活が人並みにできるよう、賃金も要求する。人間として、労働者として不安なく暮らしていくために、職場がなくなったり、国鉄が大資本のくいものにされることを許してはおけない。国鉄の分割民営化などもってのほかのことだ。

さらに、生活に若干のゆとりは必要だ。生命・健康を考えるなら、労働時間短縮も、職場環境も働きやすい、快適とまでいかなくても我慢できる限界がある。神棚を飾って、それを義務的に拝めといわれるのは、精神的苦痛の強制ではないのか。横浜の相模鉄道労組は、昨春秋、週休二日制、週三五時間労働制を勝ちとった。実施は六〇年からだという。輝やかなしい成果だ。このような先進的経験をわれわれも受けつがねばならない。

三井三池有明炭鉱でまたまた八三人の仲間が殺された。徹底した「合理化」のいきついた姿である。

③ 差別との闘い 差別現象は資本主義社会であるかぎり無数にある。その中で特に、中小労働者、未組織、下請孫請労働者との連帯、婦人労働者との連帯を追求することをここでは述べる。これが反差別闘争の最重要課題であるからだ。

春闘勝利の鍵は、賃金抑えこみ、臨調行革・軍拡路線をおし進める政府権力者、独占資本との闘いである以上、いかにして味方の戦力を厚くするかということが最大課題である。差別されている社会的弱者との団結連帯を強めることだ。

昨年も一つの事例があった。全国一般労組でアンケートをとった内容は、「公務員賃金の凍結をどうみるか」ということだったが、おどろくことに約二分の一の労働者が、「やむを得ない処置だ」と答えたのである。これは全国一般労働者がおくられているからではない。広範な中小労働者の大企業労働者に対する気持を率直に示していると受けとめねばならない。今日まで総評運動でも中小労働者との連帯を努力はしてきたが非常に不充分だったのである。

中小未組織労働者からみれば、総評労働運動は大企業労働者の運動だと受けとめているのである。

例えば、国鉄内部ではどうか。最近、国鉄内部にも、下請孫請労働者が多くなった。或いは関連労働者も増えている。

国鉄労働者は、それらの下請、孫請労働者とのように連帯しているか。賃金、労働時間、作業環境などに国労がどのように目配りしているか。また、労働者同士では交流などが行われているのか。今日、国鉄労働者に対する攻撃はすさまじい。であるから、ますます、下請孫請労働者と、また、街にいる未組織労働者との連帯をはかり、反撃のための味方陣営の層を厚くすることが必要だ。

回り道のようにみえるがそうではない。国鉄問題の勝負は一年や二年ではつかない。長期戦である。だから、この春闘行動の中で改めてこのことを職場でもとりあげて討議して欲しい。

婦人労働者、勤労者は今日、総ゆる差別の中で苦しんでいる。賃金、昇給、昇進、さら

には雇用さえも不安定状況にある。パート、内職などでは低賃金であるだけでなく、その他の労働条件も全くひどい状況にある。

働く婦人の総数は、四三〇〇万、総労働者の三分の一に達しているのである。その三分の一に達する労働者として、かりとした連帯をすることは当然のことである。すでにILOでは、婦人差別撤廃条約が成立しているが、日本でもその批准にむけて男女雇用平等法の準備を急いでいる。平等と保護を主張する労働者側と、平等か保護か、二者択一として迫っている資本側の激しい争いが続いている。

われわれは婦人の差別を性によるものではなく、それを挺子にした労働条件の切り下げと受けとめ、連帯を強めねばならない。

国鉄労働者の課題

国鉄労働者の最大の課題は、国民の足を守ることだ。国民の足を守るとは、分割・民営を防ぎ、ローカル線廃止を食いとめることである。そのことが同時に労働者の職場を守ることを意味する。独占資本は、国民の財産国鉄をいかに安く払い下げさせ、そこにデパートなり、住宅を建てるか虎視たんたと狙っている。民営にするという以上、民間企業にとって安い買物でなければならぬ。二〇兆といわれる赤字くらい、若干のヤードを売り払うだけで充分間に合ってしまう。

ねらいは一〇〇兆とも二〇〇兆ともいわれる国鉄をただ同然に買いうけることにある。絶対、この資本の謀略をくいとめることである。現在には中曽根臨調に権力者も資本もマスコミものって、分割民営を煽りたてている。だが、われわれは、国民と緊密に連帯してこれを粉碎しなければならない。それには、職場労働者をおそう個々の合理化と徹底的に闘いながら、絶えず最後の大勝負、分割民営に眼を向けていかねばならない。

国鉄総裁仁杉は、国労側の話し合い、提案を拒否した。国鉄官僚は、も早、権力独占の走り使いとなってしまう。われわれは国民の足を守ることに最大の関心をもつ。分割民営されれば、当然、国民本位の国鉄運営は、利潤本位のものとして変わることは避けられない。そのため、窓口など乗客と接する場所で、国民との連帯を強めねばならない。多くの労働者、勤労者に親切に接することは当然だ。能率をあげるために当局と協力するのではない。親切な応待をというのである。窓口に切符を買いにくる労働者・勤労者に余分な媚態を示すことは必要ないが、気持ちよく、つまり親切に接触せよといっているのだ。それが国民との連帯統一につながる。私も切符を買いに窓口に行くが、不愉快な思いをすることは少なくなった。気配りがひろがってきたようだ。

再建のために協力をと仁杉は言ったが、協力を求めるなら分割民営に反対しなければならない。国鉄労働者を不安におとし入れる様な合理化を是正しなければならない。

労働者に不安なく働ける職場を確保しなければならない。権力者や大蔵官僚や財界の欲望や間違いを指摘しなければならない。国鉄労働者は、民間大手組合のように、無条件で白旗を掲げることは決していないことを決意しなければならない。

闘いの組織

① 職場闘争・職場抵抗

職場での活動は労働運動にとって原点である。その活動の内容は多様である。国鉄労働者に加えられつつある政府権力者と当局者の攻撃は他の企業職場にみられない激烈なものである。その攻撃は、職場つぶし、労働密度強化、賃下げ、労働時間延長、配転など徹底的な労働者いじめの内容である。

一方、これらの物質的攻撃は同時に、労働者思想の骨抜き、労資協調路線のおしつけなど、思想攻撃を含んだものである。東京駅の神棚など突飛なものとものねらいは労働者思想に対する挑戦であろう。

また、全国的に展開されているバッチャリボン外しも甲府支部の質問状にあるように、それを外したからといって「赤字」がなくなるわけでもないし、国鉄再建ができるものではないことは自明のことである。しかし、気狂いのように、労働者を攻めるのは思想攻撃の典型だといってよいだろう。

このように、労働者そのものに対する挑戦は国労が参ったといわれないかぎり続くだろう。労資協調派の組合とはここが違うのである。どんなに殴られても踏まれても、いや殴られれば殴られるほど強い反発が起きるのは至極当然である。国鉄当局者が一部の組合員の煽動などと思いついておどかすかぎり、解決はあり得ないことを銘記すべきである。

また一方、極く若い労働者の間に私生活関心派が存在しているのも事実のようだ。マイカーとか女友達のみを向けていると年輩者がこぼすのを聞くこともある。しかし、彼らは積極的に第二組合に動くわけでもない。その点は裏切りといった意識をもってはいない。若者特有の一時的現象だとみてよいだろう。若い時はそういうことは誰にでもあったのではないか、ご苦労のことだが、活動家は根気よく、彼等を教育しなければならぬ。一時の熱病から醒めて良い活動家に育っていく可能性はおおいにあると思う。できることから始めることが必要だ。東京駅の五人組の活動など、おおいに参考にすべきだろう。鉄弘労などでは春闘時、自分で書いた様々のビラを貼っている。職場にも地域にもここにも学ぶことがある。

② 地域活動の強化

地域活動は、職場闘争と並んで労働運動の二本柱である。とくに、国鉄つぶしをくいとめていく鍵は、広範な国民、勤労者の支持を必要としている。窓口で親切に応待することの必要性は前述したからここではくり返さない。

ここでは、地域社会での労働者・勤労者との多面的な接触共闘を指摘したい。ともすれば、大企業労働者、本工労働者との連帯だけが考えられがちだが、中小労働者、未組織労働者は本工労働者の倍もいるのである。その人々と連帯しなければ多数派になることはできない。職場活動と関連することだが、今、国鉄下請である車輛整備会社の経費コストを一〇%切り下げよう通告されている。国鉄合理化の一環としてとられた処置である。単純に言えば、車輛整備の労働者一〇人に一人が余るといふわけだ。生くびを出すか否かはこれからだが、この問題を国鉄本工である国鉄労働者は真剣に自分のこととして連帯でき

るだろうか。同じ状況にある労働者は無数にいる。トヨタの「カンバン」方式と言われるものは、この車輛整備のやり方と全く同じように、無条件で一〇%コストを下げていく式のやり方だ。それによって、下請・中小企業は悲鳴をあげ、下請労働者に賃金切り下げ、労働強化がおしつけられている。だからこそ、春闘を闘う時、自分の賃金・反合要求だけでなく必ず中小・未組織の最低賃金の要求や中小労働者の反合要求を同時に掲げて闘うことが必要だ。また、同時に、農業問題や漁業の問題、さらには消費者運動なども連帯できる分野を広げて共闘することが大切だ。

日経連が今度の「報告書」で強調している教育問題に対する関心も強めねばならない。彼らは産学協同の道を強め、独占資本の支配をさらに強固にするための教育改悪をねらっている。昨年、佐渡ヶ島へ行った。若い全通組合員と話したが、この小さな島での生活調査をやってみるようには私はすすめた。隣近所の人達がどのくらいの生活費でやっているか。大都市ではそれは楽な作業ではない。しかし、貨物廃止反対の署名集めをした経験をもつ国労組合員の諸君が工夫をすればまだまだ多くの地域活動の道はひらけてくるだろう。小さなやれるところからはじめよう。

③ 政治戦線の統一

国鉄の気狂いじみた攻撃はすべて政府権力や独占資本や監理委員会の命令からはじまっている。したがって、反撃は職場、地域から政治そのものの革新にむけられることは当然である。政治さえ変えればと行って職場闘争や地域活動をさぼるのは政治主義だが、両方同時に闘争を強めていくのが正しい方針だ。

したがって、われわれは革新政治勢力の大統一を求める。社会党、共産党及びその他の革新勢力の結集を求める。

実情はなかなか困難が多い。「違憲合法」論とか、「現実的」とか社会党の真意はよくわからないが、われわれは社公とか、社公民とかの政権構想に断じて賛成できない。また、共産党が「ひとりよし」とする態度も評価できない。職場に働く労働者は、「異は異」として共同することを求めていると思う。

先頃の東京駅への合同調査団といった、小さな協力の中に労働者を激励する姿をみることもできる。両党とも労働者に依拠しないかぎり発展はあり得ない。労働者のおかれた厳しい状況を認識して協力し合うことを求めたい。また、国鉄労働者はどんなに党派性の違いがあっても社共を軸にした政治戦線の統一を求めて行動しなければならぬ。

労働の二重性を考える

——「発想の転換」で労働運動の再生は可能か?——

マルクス経済学の核心

私たちは日頃よりマルクス経済学の学習を重視し、不十分ながらもその学習をすすめている。しかしながら商品の使用価値、交換価値、あるいは労働の二重性などを学習する時、それが日常の私たちの運動とどう関りあうのかいつも明らかというわけではない。

しかしながら資本家たちは、マルクス経済学の役割を十分に承知している。したがってマルクス経済学にたいする攻撃を、一日たりとも怠ることはない。彼らの攻撃は、いつもマルクス経済学の核心部分に向けられている。

ではマルクス経済学の核心部分とは何か。

マルクス自身によって執筆され、彼の経済学が集大成されているのは『資本論』である。彼がこの本で明らかにしたのは資本主義社会の経済的運動法則である。彼は、人間社会一般の経済的運動法則を明らかにすることを課題とはしなかった。彼が、人間社会一般について語っている時にも、頭の中には、つねに資本主義社会があった。マルクスは労働者階級と資本家階級との間の階級闘争の必然性が、資本主義経済の運動法則にあることを明らかにした。したがって資本主義経済の運動法則を誤って理解すると、労働者階級と資本家の階級闘争の必然性が理解されない。

まさに資本の攻撃は、資本主義経済の運動法則にもとづいた非和協的な階級闘争の必然性の論証に向けられている。他方、私たちの内部にも、資本主義経済の理解について若干の混乱が見られる。

労働の二重性をめぐる混乱

たとえば、全通労組中央本部交渉部発行「交渉情報」(第七三号)に掲載されていた「五九年二月の区分運送改変計画に対する当面のとりくみについて」の中に、つぎのような一節がある。

「事業の公共性を、しかも永続的に提供しうるものとして確保することは、公共事業に働く私たち全通の責務であり、郵便のサービスを改善することは、私たちの労働の有用性をたかめることである」とうけとめ、『よりやすく』『よりはやく』しかも、『あんげんに』を基本に、省の施策に対応することとし、早急に組織的合意をえて制度改善要求を配置することとします」。

「郵便」という商品の有用性をたかめる必要が生じている現実是否定できません。それは、私たちの労働の有用性を高める面も持っており肯定しなければならぬ表情にあります。ここでは、商品の有用性が労働の有用性を高めると言われ、さらには労働の有用性を高めることに労働者は反対できないと主張されている。

さらに最近、労働の二重性に着目し、労働の価値生産的側面と使用価値生産的側面から説きおこし、労働運動の再生を考える人がでてきた。

ここでの論点を明らかにするためにこの「経済学者」の主張を若干引用すれば——。

「従来、労働組合が主として問題にしてきたのは、労働の価値生産的側面であったといえる。そして搾取の強化になるか否かという点が対応の基軸であった。資本主義社会における労働運動の基礎理論としてはその点をあきらかにしておかなければならない。

しかし同時に、労働のもう一つの側面、使用価値生産的な側面を、労働のあり方を問う側面をも問題にしなければならぬのではないだろうか。労働者は、労働をとおして人間を形成していく。日々の労働は、労働者の人生そのものである。それだから、労働者は、矛盾を感じつつも小集団活動に参加し、それを積極的に評価するのである。そしてさらに、労働をとおして協業関係が形成される。協業によってつくられる労働者の人間関係は、現実の労働者社会の基本単位であり、基本組織である。そのあり方が、トータル的社会的あり方を規定するのである。

さらにつきのようにも述べている。

「労働は『被搾取労働』であるとともに、人間の生命活動であり、社会的に有用な使用価値をつくりだす活動である。だから労働者にとって意義のある労働のあり方を追求し、それを保障するような職場と企業体をつくりだしていく運動（政策闘争）はけっして『ブルジョア的』ではない」。

マルクスが述べているように、労働の二重性は、それによって初めて批判的に証明され、この理解こそがマルクス経済学理解の中心点である。したがって労働の二重性について正しく理解することが前述のような主張の是非を問う場合の大前提となる。

資本主義における商品、および労働の有用性

「交渉情報」の筆者は、商品の有用性が労働の有用性を高め、労働者は労働の有用性を高めることに反対できないと述べている。はたしてそうであろうか。

商品の有用性によって、この物自身が使用価値となる。つまり、有用性は、つねに物そのものと結びついており、その物自身、たとえば机とか上衣自身が一つの使用価値となる。そして使用価値は、どんな社会においても、富の素材的内容、具体的な実体である。

どんな社会、資本主義社会であろうと、社会主義社会であろうと、使用価値なくしては存続できない。したがってその生産は、不可欠となる。

マルクスは、使用価値の生産についてつぎのように述べている。「上衣は特別の欲望を充足させる一つの使用価値である。これを作るためには、一定の種類の生産的活動を必要とする。生産的活動はその目的、作業法、対象、手段および成果によって規定される。労働の有用性が、かくて、その生産物の使用価値に表わされ、すなわちその生産物が一つの使用価値であるということのうちに表わされているばあい、この労働を簡単に有用労働と名づける」。

つまり労働の有用性とは、生産的活動であり、例をあげるならば裁縫である。この裁縫によって完成した上衣という使用価値から、労働の有用性をみるとこの裁縫は有用労働となる。

商品と労働の有用性の関係を整理すると、「すべての労働は、……中略……、特殊な、目的の定まった形態における人間労働力の支出である。そしてこの具体的な有用労働の属性において、それは使用価値を生産する」ということになる。

したがって商品の有用性が、労働の有用性を高めるという「交渉情報」の主張は誤りである。ただ、どのような使用価値を生産しようとするのかの目的意識性によって、労働の有用性が規定されているとは言える。

前述したとおり、物の使用価値、またそれを生産する有用労働は、社会にとって不可欠であり、「労働をとおして人間を形成していく」といえる。

しかしこれは、平凡なる真理を述べているにすぎない。これだけでは、資本主義が見えてこない。否、見えないどころか、隠されてしまう。

商品の価値、抽象的人間労働

使用価値としては商品は、それぞれ上衣、ズボンといったように質的に異ったものである。しかし質的に異った物が等置され交換されるのは、そこに共通なものが存在するからに他ならない。

その共通なものとは、すべての商品が人間労働一般の生産物であるということである。労働は、一方において裁縫とか機織とかいった特殊の生産活動であるが、他方において労働は人間の頭脳、筋肉、神経等々が生産的に支出されているという生理学の意味で共通な人間労働である。この意味における人間労働は、使用価値を生産する有用労働とは異なり、どのような具体的形態で支出されるかは——たとえば裁縫、機織など——問題でない人間労働力の支出である。このような人間労働力の支出として商品を生産する労働は、価値を形成する。価値として商品は、その生産に人間労働力が支出され、人間労働が対象化されていることしか表現していない。このようなものとして商品は等置され、交換されうる。

マルクスは、人間労働は抽象的に人間的な労働として価値を形成すると述べている。以上のようなことは、「交渉情報」の筆者はともかくとして、この「経済学者」氏には自明のことであろう。問題はこの先である。

労働の二重性とは、一度働くことではない

この「経済学者」は、資本主義社会における労働が、疎外された労働であることは認める。しかし労働は、人間の生命活動であり、社会的に有用な使用価値をつくり出す活動であるから、労働者にとって意義のある労働のあり方を追求し、それを保障する職場と企業体を作る政策闘争を、と主張する。

このような主張は私に、マルクスのつぎのような文章を思いださせる。

「彼ブルードン君にとっては、あらゆる経済的範疇は善い方面と悪い方面の二方面を持っている。——中略——。善い方面と悪い方面、利益と弊害、これらを一緒にしたものが、ブルードン君にとっては各経済的範疇内の矛盾を形成する。解決すべき問題、それは悪い方面を除いて善い方面を保つということである」。

この「経済学者」は、労働の二重性を、価値生産的側面と使用価値生産的側面とまったく切り離して考えており、その統一において、したがってまた、どのように統一されているのかはまったく考えていない。それぞれの概念が、一人歩きしている。

人間は、自然に働きかけ自らの欲望を充足する。

人間は、労働対象に対して労働手段をもって働きかける。ここでは労働は人間と自然の一過程としてとらえられ、この両者の関係はあらゆる社会に共通のものである。マルクスはこれを単純なる労働過程となづけている。しかしこのようなものとしての労働過程そのものは現実には存在しない。

資本主義社会ではそれが商品生産として実現される（単純商品生産においても同じことではあるが、ここでは資本主義的商品生産と考察する）。

人間に必要な物の生産が、商品生産という形態を得ることによって、生産者と生産手段の関係、生産者と生産物の関係、生産者相互間の関係が、生産の目的そのものが変化する。

まず労働は、資本家を買った物（労働力）と物（生産手段）との間の一過程となる（これは労働者が物になることを意味するのではない。そのようなものとして現われるということである）。したがってここでは生産物はその生産者（労働者）には属さない。また生

産の目的は、使用価値にあるのではなく、価値の生産にある。使用価値は、価値の現象形態としての交換価値の素材的な担い手としてののみ意味がある。

資本家はたえず、自らの商品に含まれている労働量が、社会的に必要な労働を代表することに、すなわちその商品の社会的価値と一致させることに努める。資本家にとっては、その商品の社会的価値と一致する価値をもった使用価値の生産が問題となる。

なぜならば価値の実体をなす労働は、同一人間労働力の支出であり、個人的労働力の支出ではないからである。個人の労働力は、商品の生産に社会的に必要な労働時間を要するときにのみ、社会的平均的労働力として作用することができる。

また資本家は、労働者に価値を生産させるだけではなく、自らの労働力価値以上の価値、すなわち剰余価値の生産を命ずる。これがそれが資本家の目的である。

たしかに労働者は使用価値を生産している。しかしこの使用価値の生産は、彼が資本の価値増殖を担うという限りでのみ許され、実現される。資本の価値増殖を損う労働は直ちに停止される。すなわち首切りである。資本主義における失業の不可避性ほどに、労働の二重性をいかに理解すべきかを教えているものはない。

資本主義生産過程における具体的有用労働

具体的有用労働が使用価値を生産し、抽象的労働は価値形成的である限りにおいてのみ意味があることをこれまでみてきた。ここでは、資本主義的生産過程における具体的有用労働を改善することは何を意味するかを考えてみる。

これについて「交渉情報」の筆者は高めると大胆に述べ、「経済学者」氏は「人間化」ときわめて抽象的にしか主張されていない。

人間社会発展の物質的基礎は、生産力の増大にある。マルクスは、「生産力は、もちろんつねに有用な具体的労働の生産力である」と述べている。

しかし資本主義的生産過程においてこの生産力は、資本の生産力としてしか現われない。なぜならすでにみたように労働力も生産手段も資本として、資本家の下で結合されるからである。具体的有用労働は労働の使用価値生産の側面だからといって、それが資本の生産力である事実を否定できない。したがって具体的有用労働——使用価値生産の側面に頭をめぐらすことは、資本の生産力について考えることであり、労働の有用性を高めるとは、資本の生産性向上運動に協力することを意味する。それでも「交渉情報」の筆者は労働の有用性を高めることに賛成すべきだと主張するのであろうか。もしそうであるならば、「交渉情報」の筆者はマルクスの片言隻語を用いて、労働者を生産性向上運動に駆り立てようとしているにすぎない。

さて「経済学者」氏は、労働のあり方の内容として「作業の仕方、手順、作業量、作業密度、要員の数と配置、仕事の内容を規定する設備投資のあり方と、技術等々」をあげ、これをチェックしろと述べている。ではどのような視点からチェックするのか。

「経済学者」氏は一方において従来の労働運動が、搾取の強化になるか否かという点で対応してきたと述べ（このように従来の労働運動を特徴づけることができるかどうか疑問であるが、ここでの論点ではないのでそのままとりあげる）、それだけでは不十分であると労働の使用価値形成的側面を強調されているわけだから、このチェックが搾取の強化か否かの視点ではないことが明らかである。

しかしマルクスは有用労働はつねにその利用効果と結びつけて考察されると述べている。すなわち生産性である。したがって有用労働の変化は、最終的には生産性の上昇か、低下、

いいかえるならば搾取の増大か減少を招かざるをえない。有用労働の内容、あり方についてもそれが資本の価値増殖の手段としての意味があるとすれば、それと切り離して論じることができない。

「経済学者」氏は、氏の考えておられる労働の使用価値形成的側面の変化は、生産性を上昇させるのか否かを明らかにすべきであろう。

もしかしたら「経済学者」氏は、自分は生産性云々ではなく、労働における労働者の主体性を言っているのだと主張されるかもしれない。ならば労働において労働者が主体になるとは、具体的にはどういうことか、またいかなる条件の下でそれが実現されるのかをお尋ねしたい。

問題は所有関係にある

以上、労働の二重性がいかに統一的に理解されるべきかを考えてきた。この問題を考える場合、私たちが常に念頭に置いておくべきことは、冒頭で述べたようにマルクス経済学の任務である。経済学とは、生産そのものではなく、生産における人と人との関係、生産関係を分析する科学である。

生産関係の中心をなすものは、所有関係である。「経済学者」氏は、資本主義社会の労働は、疎外された労働であると正しく指摘されたが、その原因については必ずしも明確にされていない。労働力の商品化と言っただけでは不十分である。労働力の商品化は、一方に生産手段を所有する階級が、他方にそれを所有しない階級が存在する時にのみ生じる。

またこの「経済学者」氏は、現在の労働が労働者にとって意義がなく、それを保障するような職場と企業体が存在していないと正しく主張されているが、なぜ存在しないのか。資本家によって主要な生産手段が私有化されているからである。それ以外の理由は存在しない。

「経済学者」氏は、「労働の人間化と、協業関係の人間化は、労働者階級の解放にとつて、基軸となる要素だといえよう」と述べている。これは人間による人間の搾取の廃絶なしには、したがって資本主義的所有関係の廃絶、社会主義革命によってしか実現できない。これを政策闘争によって実現しようとするのは徒勞であり、誤りである。

むすび

この「経済学者」氏の主張には、多くの不明確な点が存在している。私にとってなによりも疑問なのは、なぜ搾取の廃絶を労働者階級の目標として明確に位置づけないのかという点である。搾取の廃絶ではなく、「労働者の連帯」、「労働の人間化」、「協業の人間化」といった文句がつかわれる。なおそのうえ、資本主義の労働を論じているにもかかわらず資本主義的所有関係にふれられていない。経済学者の、とりわけマルクス経済学者の労働の論じ方としては、はなはだ不十分といわざるをえない。

終りにあたって、「資本論」よりつぎの文章を引用しておく。私の考えは、この文章につづいているともいえる。

「機械は労働者を労働から解放するのではなく、彼の労働を内容から解放するのであって、労働の軽減さえも、呵責の手段となる。労働者が労働条件を使用するのではなく、逆に労働条件が労働者を使用するということは、資本主義的生産が、単に労働過程であるのみではなく、同時に資本の価値増殖過程でもあるかぎり、すべての資本主義的生産に共通のことである」。

「首切りを迎えつつ組織づくり」へ一歩前進

——第一七回全国青年団結集会の報告——

青年労働者が求めるところは一つ

青年労働者の真剣さが急速に強まっています。仲間とともに本気でたたかい続けている姿に青年労働者の気持がひきつけられるようになってきたことです。一人ひとりの春闘のとりくみをとってみれば不十分なことがまだまだ多いが、青年労働者が求めるところはひとつです。そんなことを感じさせてくれる第一七回全国青年団結集会でした。国労長崎や新白砂パート・社員労組の仲間のたたかいに、ほとんどの参加者が共感を示し、心をひとつにしあうことができたからです。首切り合理化がふきあれるなかで、たたかう姿が広汎な仲間の心をつかむという統一闘争の前進の芽となった第一七回全国青年団結集会の概要を報告します。

第一部（泊りこみ交流会を含む）集会に三百五十人、第二部総決起集会に五千数百人の結集をかちとった長崎県実行委員会の努力はたいへんなものでした。完全地区わりで地区実行委員会を全県下に組織し、人集めから資金づくりまで地区の仲間がいっしょうけんめい努力しました。佐世保地区などでは地区実のとりくみをつうじて地区労青婦協に新たに加入する単組をかちとったりしています。現地要員には二七〇人が組織されました。要員の仲間は二三日から二六日にかけてほとんどが年休をとり、文字通り昼夜をわかつた活躍しました。長崎の仲間がもっとも力を入れたのは構成詩「嵐の中でも反撃を」です。国労長崎保線区の仲間のたたかいを、実際にたたかった人たちが中心になり討論をくりかえし、出演し、わざとらしや「演出」をまったく感じさせない見事な内容となりました。

新白砂の仲間のような団結をつくりたい

第一部集会は全国から二八〇〇人の仲間が参加し、二月二五日の午後一時かつきりにはじめられました。八七人の代表団を送りこんだ北海道実行委員会は、一人あたり約十五万円の旅費をつくり出しての参加です。長野、富山をはじめ北信越四県の仲間は二〇時間以上かけバスではるばる参加してきました。車中でみっちり交流できたことはいうまでもありません。関東の仲間は飛行機を一台チャーターしての参加です。第一部集会参加者は二十歳代前半が約六〇％を占め、若い仲間の割合が多くなっているのが特徴です。

第一部開会集約では社会党高沢副書記長、総評佐野組織局長をはじめ多くの来賓から激励のあいさつをうけました（総評佐野組織局長は翌日昼までおこなった分散交流会にも参加、青年労働者の実態と声にじっくりと耳をかたむけていただきました）。闘争報告は八王子市職、国労甲府駅分会、愛知新白砂パート・社員労働組合、鹿児島県実行委員会からうけ、それぞれ満場の声援と拍手に包まれましたが、なかでも印象的だったのは、新白砂の書記長根米美さんの報告です。

「三八〜五三歳のパート婦人が家族の反対、世間の目、子供の結婚、就職不安をのり越えて裁判闘争に臨んできました。私たちが一年ぐらいのパートならやめていたと思います。

しかし十年間働き続け、低賃金だからと怠けたりしたことは一度もありません。それをパートだから首とはどういうことでしょうか……。一人の脱落者もなく一年間たかかってこれたのはやはり団結でした。そして私たちを支援してくれる仲間の温かさが支えになりました」という訴えは、参加者一人ひとりに「新白砂パート社員労働組合の報告を聞き、だまっていたはいけない。ものをいわなければ、団結しなければ殺されてしまうと感じた。また団結のすばらしさをあらためて知った。今後自分もそうした団結の輪をつくりたいし、またそうした仲間の力になりたい」（参加者―鹿児島県職、女性、二五歳―の感想）という気持を呼びおこしたのでしょう。

第一部開会集会の講演は毎年来ていただいている灰原さんです。「やらずぶったくりの攻撃に、団結・抵抗・統一を」と力強く説かれました（なお講演内容は『青年の声』一一〇号に掲載されるそうです）。

「合理化」で生活はめっちゃくちや

五時に開会集会を終えた参加者は、バスで旅館に移動し、七時から十時まで、さらに翌二六日午前九時から十一時半まで、十人づつにわかれてヒザつきあわせての分散交流会に入りました。分散会には「生活・職場実態点検手帳」をつけ、その結果を記入した「全国統一「手帳」集約用紙」を各自がもちよりました。「集約用紙」は九割以上の仲間が提出しましたが、十分不十分はあってもそこには自分の一ヶ月の生活実態と賃金要求が記されています。それはすくなくとも一ヶ月間は参加者が自分の生活実態、職場実態を点検しておかないと提出できないものです。「集約用紙」は各自がコピーをとってきて、自分の分散会参加者全員にそれぞれ配られました。

六時間、二日間にわたる分散会でどんな話しあいがあったか、当日提出してもらった分散会座長さんの「報告」と「参加者アンケート」からいくつか紹介しましょう。

「食費の切りつめが一番多い、同じものを昼も夕も食べる収入に応じた生活をしてしまう貧乏人生活に慣れて不満も出ないようになって……。仕事で疲れて、家へまっすぐ帰り、しょうちゅうを飲んで寝るという人が三人いた」「国労で独身寮住まいの人は一ヶ月三二〇〇円の食費。オルグ、集会等夜遅い時は欠食」「官民間わず『赤字』の大宣伝。それにひきこまれて、労働者が『そうかなア』と思わされている。とくに民間では『小集団活動』がここ二三年特に大規模におこなわれている。それにはたいしても『まあ、ちょっとガマンすれば』で引きこまれている」「超勤が多いが、恒常化してしまい、手当を生活費にくみ込んでしまっている。もしも配転されて職場が変わり、手当がつかなくなると生活できない」（国労・自治労）。「実地監査で当局の管理者が天気のよい日に限り、配達のあとにくっついて歩き、配達区の人員をどんどん減員している」（全通）。「浄水場が来年委託になる予定。そういつたなかで自分がまっ先に首になると思った仲間は、民間委託を遅らせるために一生懸命仕事をしよう。仕事をしてから文句をいおうといっている。自分は『仕事で競争すれば絶対民間には勝てない。そのうえもうれつな労働条件になることはまちがいない』といっている」（佐賀自治労）「国労では大量の『余剰』人員がくり出され、それら『過員』の労働者にたいして、フル・ムーン、の券、周遊券などのセールスを

強要し「職場では労働組合はない。一人の管理者と、一人の労働者という関係だ!!」と命令と服従をおしつけ、拒否し、抵抗する者にたいしては業務命令と処分。管理者が組合員の胸ぐらをつかみひっぱりまわす、ドーカツ、おどしという現象が出ています」等々。どの分散会でもまさに「やらざるぶつたくり」そのものの実態、人間として生きていく上で必要欠くべからざるものを節約させられ、合理化でなぶり殺しにされようとしている実態が共通して出されました。

「私の世界がひろがった」

多くの分散会座長さんから「一人ひとりの実態の出しあいに時間をとられ、なかなか焦点をしばった討論にまでいかなかった」と指摘されています。それくらい自分の生活や職場で不満に思っていること、悩んでいることが話しても話し足りないということかも知れません。もっときびしくみれば、参加してくる仲間たちがなかなか事前に、つまり日常的に職場で、家庭で話しあい、たたかいはおこす『手帳』もそのためにしっかりとつけ続けることができずにいることの反映でしょう。日常のとりにくみなくして、集会だけ充実させることはできないわけですから、いよいよ団結集会を一発集会などでは終わらせず、日常闘争のひとつの集約点だし、春闘の出発点とすべく指導部が心してかからねばならないことはいうまでもありません。

ただ、全国から、かつ職場のちがう仲間が二日間交流できたこと自体、前進の芽を育てています。参加者のアンケートから、分散交流会の感想を紹介しましょう。

「とてもいい経験をしたと思っています。いろいろな職場でのさまざまな問題をきいたり、いっしょに考えたり、二日とも三時間という時間があつた間にすぎた感じでした。またひとつ、私の世界がひろがったことに感謝します」(福岡教組、三〇歳、女性)、「お互いの本音の部分を話ができたので、すがすがしい気分であります。このことを今後の私達の力にしたいものです」(自治労、二八歳)、「当局の攻撃を受けている国労の方の話を聞きわれわれもいろいろなしめつけから今から本場に当局に対しての力をつけなければ、国労のつぎは教組だ」(教組、二八歳)等々。

また分散会のなかで自分の不十分さに気づき、何を考え何をしなければならぬか、労働者らしく課題を自分のものにして多くの仲間が帰ったことは、何よりの成果です。たとえば……。

「私たちの要求が自分のおし込められている生活のなかからしか考えきれず、少なくなっていることで、ほんとうに心まで貧しくなされていることがわかった」(全電通、二七歳)。「学習の不足を痛感した。賃金とは？ 労働力の再生産費？ 私の意識のなかは給料というみかたにとどまっている」(全通、二六歳、女性)。「私自身が手帳をつけていなかったので反省しながら他の仲間たちの生活実態にふれ、私たちが労働者意識をもっともたねばならないことをいっそう痛感した」(市職労、二八歳、女性)。

創意工夫で仲間の団結を

不十分なことであっても、みんなで交流、討論するなかで、そこらの組合大「幹部」の

御歴々よりずっと鋭く、ずっと実践的な今後の方向にもじみ出ています。ひとつは次の座長さんの意見に集約されています。

「情勢の認識として『きびしい』『資本は本気だ』という確認はできるが、それにたいする対応としては『みんなで頑張ろう』と『どうしていいかわからない』とはっきり分かれては流されている。つまり、仲間と少しでも討論しているところは前向きだが、そうでないところは流されている。……『人間らしく生きる、働くこと』はどういうことなのかを今一度確認しあうことと、そこからみんなでやれることは何かをみつけ出し、流されずに具体的にふみ出すことが求められていると思う。」もう一人の座長さんは次のようにのべています。「以前は交渉して物がとれていた。今は敵の攻撃もあって自分の損得を考えている人が増えた。……朝の点呼でも当局に逆らうと業命——処分を出してくる。不十分すぎるとつめると鉄道公安官など権力で対抗してくる。一人ひとりでは弱い、くずれていく。人のことを自分のことのように支えてくれる職場の仲間がいる。そういう人がいないと今は続かない。」もう一人の座長さんは分散会で八四春闘勝利にむけ確認しあったことを次のように報告しています。「工夫をしたたかいかい（リボン、ワッペンをつけるなど当局がいうなら、自分の服にペンキで要求を書く）。・当局は組合員の家庭のことまでよく調べている。仲人の家まで足を運んで。労働組合の側はどうか。そこが不足している。徹底的に仲間と家庭を含めて話しこむ。・春闘では一言でもいいから当局とわたりあいたい、資本とは当局とはどんなものか知りたい。」

労働者は社会の主人公だというたかいかいの土台を、具体的な抵抗闘争をつうじ、そして仲間の支えあいをつうじ、一人ひとりのものにしていく、そのことがこの社会を変える組織づくりになっていくという方向性が、現場でたたかう若い仲間たちによってみごとにかまれ出しているといえましょう。

なお、今回はじめての試みとして、分散会座長さんをブロックごとに集め、一日目夜一〇時一五分～一時まで座長会談をもち、分散会充実のための努力をしました。

国労長崎の仲間を激励交流

二六日昼には、分散交流会を終えた全国の参加者二八〇〇人と、総決起集会に参加する長崎県と佐賀県の仲間八千七百人が続々と国際体育館につめかけました。広い体育館の一階はダンボールをしきつめ座りこみ、二階には通路すべて使って補助イスをならべました。それでも会場に入りきれず、立ち見の人が出るありさまでした。江口社会党県本委員長、田口長崎県労評議長からのあいさつ、春闘共闘会議から丸山総評副議長（自治労委員長）の問題提起をうけ、分散交流会集約、全国の争議団紹介、カンパ要請（会場カンパは八万四六六円）等のあと、長崎県実行委員会が全力を挙げた構成詩「嵐の中でも反撃を」の上演に入りました。全国でも有数といわれる門司鉄道管理局のファッショ的職場支配と、労働者をまるで小荷物のように強制配転する合理化攻撃に、仲間うちの話しあいをくりかえしながら抵抗し続ける国労長崎保線区の仲間の姿に、会場は怒りも笑いも涙も一つにして見入っていました。構成詩の終わったとき、分散会ごとに心をこめてかきこんだ国労長崎の仲間への檄布二五〇枚を各座長さんが掲げたあがったときは、会場が真赤にそま

ました。構成詩については次のような感想が寄せられています。

「国労の『構成詩』、これからの労働者の生活はどうなるのか。『団結』しなければとつうせつに思った。どうして資本家は自分たちの利益ばかり考えるんだ、と叫びたい」（自治労、二八歳、女性）。「構成詩のなかで、仲間が強制配転させられたが仲間が支えあって……。本当に苦しい時に支え合える仲間をつくらなければいけないと思った」（国労、二三歳）。「構成詩はとてもよかった。一人の労働者の悩みを全体でささえ、討論しているような職場づくりをめざしたい」（都市交、三四歳、女性）。

灰原さんと同じく毎年団結集会にかけつけてくれている岩井章さんから、記念講演をうけました。岩井さんは「労働者が主人公の社会をめざすことです」とじゅんじゅんと説かれました（講演内容は『青年の声』一一〇九号に掲載されるそうです）。

総決起集会は長崎の仲間からの闘争報告と集会決議を満場の拍手で確認し、力強い団結ガンバローで散会しました。なごりおしそうに手をふって場外に出ていく全国の仲間たちを、長崎の仲間はいつまでもあたたかい拍手で見送ってくれました。

第一七回集会はこれで終わったわけですが、交流を求める熱意は今回あらたに三日目（二七日）の国労長崎激励、交流行動を実現させました。東海、九州中心に各県から残った代表団一二〇人が、集会終了後の国労長崎の仲間と交流、翌二七日には長崎、諫早、佐世保の国鉄職場に昼休み時間に二五〇枚の檄布を手に交流に入りました。どこでも管理者の不当な退去命令と恫喝に抗して交流を成功させましたが、参加者は「国鉄管理者のひどさと、そのなかでも明るく胸をはってがんばっている国労組合員の姿を目のあたりにしてほんとに勉強になった」とたいへん喜んでいました。

不十分さ克服への新たな息吹

このように、第一七回集会は不十分さはあってもその不十分さを克服する力を参加者から感じさせてくれた集会として、今までとは一味ちがったものになりました。それは、何といっても第一に国鉄や民間をはじめ首切り合理化が強行されている共通の実態、第二に、これにたいし幹部請負いを排し、ほんとに一人ひとりがたたかい続けられるようにしよう、大衆路線を貫こうという参加者の気持、第三に不十分ながら三年間つみあげてきた「手帳」づけ運動のひろがり、第四に、こうしたことすべてを、「社会の主人公として、労働者として人間として働き続け生き続ける」という思想を土台として、仲間の団結の輪のなかで、貫いていこうという路線、そして第五に、自分のやれる具体的な行動を八四春闘勝利にむけ実践しよう、自分の不十分さをすこしでも改善しようという意欲に支えられてのことだといえます。

一言でいえば仲間が支え、仲間が「首切りを迎えうつ組織づくり」にむけての方向性を示してくれた集会でした。今、各県、地区で団結集会が組織されています。すぐうまくいったり、前進したりするテクニクは絶対ありませんが、青年労働者の努力のつみあげは八四春闘をすこしは前進させ、またなによりも労働運動を土台からたてなおす力を確実に全ての地域・職場にたくわえています。

岩下武夫著 (社会通信社刊)

「ソ連脅威論」の虚構

好評発売中！ B6版 二百頁

内 容

序 章 「ソ連の脅威」は存在するのか

第一章 日本における「反ソ」主義の歴史と現実

第一節 「シベリア出兵」と日本／第二節 日ソ中立条約とは何であったか

第三節 「北方領土」問題と政府・自民党／第四節 北洋漁業を脅かすのはだけか

第二章 ソビエトとポーランド

第一節 ソビエト政権と国境問題／第二節 ソビエトとファシズム・ポーランド

第三節 ソビエトと社会主義・ポーランド／第四節 ポーランド「連帯」とは何か

第三章 反ソ・反共の謀略とその担い手たち

第一節 欧州における戦中・戦後の謀略史／第二節 アメリカは「自由の国」か？

第三節 亡命者と難民／第四節 対ソ経済政策の実態

第五節 日本における「ソ連脅威論」の演出者たち

第四章 最近の反ソ論のデマを斬る

第一節 レフチェンコ事件の背景と本質／第二節 虚偽にみちたアフガン報道

第三節 「フィンランド化」の現実／第四節 大韓民航機事件への基本視点

申 込 書

注 文 部 数

住 所

送 付 先

氏 名